若越郷土研究
2の5

橘曙覧の伝記資料

杉原丈夫

家系

歌人としての曙覧を研究するには、家系の詳しい考証はあまり重要ではない。ここでは従来の研究家によつて誤り伝えられている点を訂正する程度に止どめる。

家系研究の資料としては次のものがある。

一　橘家由緒書（以下「書」と略す）
二　歴代由緒記（以下「記」と略す）
三　七屋舗部書（以下「部書」と略す）

以上三部は福井市木田町橘宗賢氏所蔵。

四　当家系譜（以下「譜」と略す）
五　正玄家譜之略（以下「譜略」と略す）

「譜」は三国町正玄馨氏所蔵。「譜略」も正玄氏の所蔵であつたが、今度の戦災で焼失した。しかし幸なことには、これは島崎圭一氏の「橘曙覧の人と芸術」に収載されている。

橘氏所蔵のうち「書」はお家流の立派な字で書かれており、初めから一冊の書として編さんされたものである。これに対し「記」と「部書」は両者を一冊の本にとじ、乱雑な字体でメモ風に記してある。後からの書きこみや帳紙もある。更に後から書き加える予定であつたとみえて、各事項毎に余白数葉をとつてある。「書」は本文と追加よりなるが、本文は享保二年ごろに作られたものであろうか。追加の最終記事は天明六年である。「記」と「部書」は宝暦十一年に最初の部分が書かれている。

正玄氏の「譜」は曙覧のことを「西山町」という語で示しているから、嘉永元年以後に正玄宣によつて書かれたものであろう。「譜略」の方は軸物になつており、天保十三年正玄宣の自筆である。

系譜の大略は橘諸兄の十代目の後裔に飛騨守嗣光という人があつた。この人は紀州田辺の城主であつたが、大治年間兵乱があり、敗走して越前に逃れ木田に居を構えた。これが越前橘氏の祖である。

嗣光の十六世の子孫を泰直という。龍玄と号した。龍玄の子に正玄という人があつた。これが正玄家の中祖である。山田秋甫氏の「橘曙覧伝」（以下山田「伝」と略す）及び井手今滋氏の「橘家泝源」（以下「泝源」と略す）に正玄を龍玄の弟と記しているのは誤りである。「書」にも「記」にも「譜略」にも龍玄の子と明記してある。ただ「部書」だけは龍玄の「子」と書いた上を消して「弟」と直してある。これは誰かが誤解して加筆したのであろう。なお山田氏及び井手氏は「歴代由緒書」より引用しているが、該当の文は「書」にも「記」にもなく「部書」にある。原本を見ずして孫引したのであろう。

正玄が龍玄の子であつて弟でないことは年齢から考えても明らかである。龍玄の父春光は天文二十二年五十二才で歿している。しかるに「譜」によれば正玄は天正年間幼年であつた。従つて正玄は春光の子、つまり龍玄の弟ではありえない。

橘家は旧家であるので、朱印状による免税地が十一ケ所あつた。これを「十一屋舗」という。このうち四屋舗は親類子方に配当していたが、その後切売して失い、松平秀康の就封後は七屋舗として黒印状をもらつている。橘家所蔵の免許状（若越古文書選に収載されている）には天正十七年の分に「親類子方十一人分」慶長七年の分に「親類子方共に七人」とあるので、橘一族が十一家族もしくは七家族あつたように誤解されているが、これは免税地が十一ケ所、七ケ所という意味である。

このことは七屋舗を具体的に調べてみればわかる。

一　居屋舗　木田町　本家の住宅である。

二　観音堂屋舗　飛騨守より八代の常円が建てた観音堂がある。

三　泰清院屋舗　山奥町　寿岳院屋舗ともいう。橘家の石塔所である。

四　御蔵屋舗　木田町羽入　藤兵衛屋舗ともいう。代々の隠居所である。

五　西屋舗　木田町　休意屋舗、玄休屋舗ともいう。龍玄の代（その父春光の代ともいう）に親類の休意（玄休ともいう）をこの屋舗に出した。

六　東町の屋舗　木田町　昔は乱雨屋舗といつた。龍玄の子乱雨をこの屋舗に出す。しかるに乱雨に子がなかつたので、龍鳧（龍玄の子）の子久左衛門をまたこの地に出す。

七　正源屋舗　石場町　龍玄の子を出す。

すなわち橘家の一族が住んでいたのは、本家を別とすれば、休意屋舗、乱雨屋舗、正源屋舗の三ケ所で、いずれも龍玄の代に土地を分与されているから、昔からの一族ではない。おそらく龍玄の代に何か経済的変動があつて、親類や子供に土地を分与せざるを得なくなつたのであろう。龍玄は天文二年生、天正十五年歿、ちようど一向一揆が越前を荒した戦国動乱の時代である。

「譜」によると天正年中正玄家に実子がなかつたので、本家橘家より幼年の男子を養子に迎えた。これが当家の中祖であると述べている。従つて正玄家は正玄以前からあつたわけであるが、正玄の養父母については何も知ることができない。過去帳を見ても法名もない。おそらく系図も何もない無名の庶民であつたのであろう。「譜略」には「龍玄之子天文天正之間来余家再継正統」とある。

正玄を正玄家の初代五郎右衛門とすれば、曙覧は六世五郎右衛門である。ただし四世は三世の養孫であるから、世代では七世になる。山田「伝」に曙覧を橘諸兄第三十九世の孫であるとしているのは、世代を数え誤つている。三十二世であろう。また血統においては橘諸兄の子孫であるが、家系としては正玄家が橘氏であるという確証はない。山田「伝」や「泝源」にある井手氏系図のうち龍玄以前の部分は橘家の系図であつて、正玄家の系図ではない。

正系家に所蔵されている昔の印鑑を見ると「蠟問屋河内屋正源」と刻んである。また明治五年の足羽県戸籍簿には正玄家の職業を「紙墨筆商」としている。いつ蠟問屋から文具商に転じたのか明確でない。従つて曙覧のころどちらの商売であつたか判明

しない。このほか巨勝子円（コシユシエン）という家伝薬も製造販売していた。

正玄家の財産程度については、井手今滋氏の「橘曙覧小伝」（以上井手「伝」と略す）は、曙覧の弟が「父祖の余沢に浴し、現に市中屈指の商家」であると述べているが、これは井手氏のひがみである。曙覧が父祖の財産を費消し負債を生じたため、弟が代つて再建に努めたのである。文久三年「御城下御用金割」を見ると、御用金の割当は、二百五十両を筆頭に五両まであつて、このうち二十両以上が百五十一人、十五両が五十三人、十両以下が百二十三人になつている。正玄家は十五両クラスであつて、屈指の商家と称するものではない。

家族関係

曙覧の家族関係については「泝源」を資料にして大谷巖氏のかなり詳しい考証がある。ここでは「泝源」以外の資料も用いて補説する。家族関係研究の資料として次のものがある。

一　橘家泝源　井手今滋氏が印刷して一族に配布したものである。奥付がないので発行年は不明である。

二　累代忌日目安附略伝「泝源」に附録として収載されている。多分曙覧の書いたものであろう。（以下「略伝」と略す。）

三　妙歓寺過去帳　忌日は累代忌日目安と一致している。

四　当家系譜　上記の累代忌日目安と一致する。

五　足羽県戸籍簿　原本は戦災で焼失したが、石橋重吉氏「幕末維新福井名流戸籍調」に収載してある。

六　福井市戸籍簿

七　山本家過去帳

八　山本家系図　これは最近書いたものである。

曙覧が生れたとき彼の祖父母は既に亡くなつていた。父五世五郎右衛門（幼名五三郎）は実業家として相当の手腕を有した人らしい。「略伝」によれば、彼は末つ子であつたが、故あつて家督を継ぎ、大いに業を弘め、家を起した。火災にあい、家屋は烏有に帰したが、数年を経ずして経営成るとある。この火災というのは文政元年七月十一日の福井大火のことである。曙覧の弟宣の自伝には、文政元年家が罹災した年に自分が生れたと記してある。

曙覧の父には五人の姉と二人の兄があつた。五人の姉（曙覧の伯母）のうち一人は不詳、三人は曙覧の生れる前に死亡している。第四女須美子だけが在世していた。彼女は福井の下呉服町煙草屋西沢庄助の妻となり、安政三年八月十二日八十余才で歿している。

二人の兄（曙覧の伯父）のうち第一子は不詳、第二子は五次郎といい、大阪の唐物屋志田垣家の養子になつている。妻は多美子、大阪の志田垣氏である。曙覧の父が死去するや、五次郎夫妻は大阪から福井に来て、曙覧の後見人として家業を執つた。二人とも福井で死去している。五次郎は天保四年八月六日歿、多美子は天保八年九月二十四日歿である。

曙覧の母はつる子といい、武生の酢製造商天王屋四世山本平三郎の娘である。つる子は二人の子を生んだ。一人は生後間もな

く文化七年七月三日死亡している。もう一人は曙覧で文化九年五月生れである。つる子は文化十年十月二十二日病歿している。歿年を「略伝」の本文では二十二才とし、頭註では二十三才としている。二十二才ならば寛政四年生、二十三才ならば寛政三年生となる。

つる子の死後父は第二の妻いし子を迎えた。彼女は三国港白銀屋の娘である。この白銀屋というのは多分白銀屋兵左衛門のことであろう。もしそうであれば、白銀屋にはもう一人の娘いは子があり、これが三国港の酒井清兵衛に嫁して生んだ娘なお子が後に曙覧の妻となつている。白銀屋は今三国郵便局のある所に明治初年まで住んでいた。

いし子も二人の子供を生んでいる。一人は生後間もなく文化十四年七月十六日死亡した。もう一人は五郎三郎（後に宣と称す）で、文政元年八月四日生れである。いし子は文政四年三月五日に歿している。曙覧が十才、宣が四才のときに当る。従来一部の研究家は、曙覧が継母と折合悪く、異母弟に家督をゆずつたと述べているが、それは明かに誤りである。

父は更に第三の妻と結婚した。彼女は栗屋氏と伝えられるのみで、名も歿年も不詳である。彼女は繁子という娘を生んだ。繁子は勝山の梅田文助に嫁し、元治元年八月十三日に歿している。繁子が親類として取扱われているのに、その母栗屋氏が過去帳に記載されていないのは、結婚後間もなく夫が死亡したので、他に再婚したからであろう。

曙覧の父は文政九年五月十二日四十四才で歿した。逆算すれば天明三年生れである。二十七才ごろ結婚し、三十才のとき曙覧を生んだことになる。父死亡のとき、曙覧は十五才、宣は九才である。

曙覧の妻なお（なをとも書いてある）は文化十三年十一月十七日生れ、明治三十七年六月十日死去している。享年八十九才である。山田「伝」に大正二年百才で歿したとあるはでたらめである。右の生歿年は福井市戸籍簿によつたのであるが、生年については多少の疑問がある。明治五年足羽県戸籍簿には、なおの年齢を五十八才としてある。これによつて逆算すれば文化十二年生れとなる。また明治三十四年に八十八才の賀を開いたという山田「伝」を信頼すれば、生年は文化十一年となる。

曙覧となおの結婚は天保三年四月十日、曙覧は二十一才、なお十七才である。彼女は三国港の材木商海津屋（会津屋とも書いてある）酒井清兵衛（清平ともある）の二女である。清兵衛は安政四年三月二十七日歿している。彼女の母いは子は既に述べたごとく白銀屋兵左衛門の娘で、曙覧の継母いし子とは姉妹であるらしいから、曙覧となおは義理の従兄妹になる。いは子は安政四年十一月十四日に歿している。なおには七郎右衛門（春嶂と号す）という弟があつたが、嘉永二年四月十七日嗣子なくして死亡したので、酒井家は清兵衛夫妻の死後廃家となつた。（未完）

（附記）本稿の資料収集については谷口初意氏、斎藤槻堂氏、石川銀栄子氏、正玄馨氏、光成魚氏、橘宗賢氏、大谷巌氏、山本平三郎夫人、高畠昌夫氏、妙歓寺住職など多くの人の御助力によっている。ここに記して感謝の意を表明する。